

## 令和4年度 学位記授与式 式辞



本日、学部を卒業し学士の学位を得た 889 名の皆さん、大学院博士前期課程及び修士課程及び専門職学位課程を修了し、修士及び教職修士の学位を得た 201 名の皆さん、大学院博士後期課程を修了し、博士の学位を得た 4 名の皆さん、学位取得おめでとうございます。本日、本学から皆さんを卒業生、修了生として送り出せることを、ご臨席を賜りましたご来賓の皆さまと、列席しております理事・副学長、学部長、および教職員とともに、心よりお祝いをいたします。

また、ご多用のところ、卒業生の門出となるこの式にご臨席を賜りました和歌山県企画部長 長尾 尚佳（ながお ひさよし）様、和歌山市長 尾花 正啓（おばな まさひろ）様、本学同窓会会長 山野井 康（やまのい やすし）様には、衷心より御礼申し上げます。

皆さんの和歌山大学での学修の多くの部分は、新型コロナウイルス対策に影響され、これまでにない形での学業を強いられたことと思います。新型コロナウイルス感染症の感染防止のための遠隔授業や課外活動の制限など、従来と異なる修学は多くの困難を生じさせたことでしょう。試練とも言うべきその困難を乗り越え、本日ここに、学位を受ける皆さんは、非常に逞しく成長されました。皆さんに、敬意をこめて再度申し上げます。「卒業、修了おめでとうございます」。

さて、この春、新型コロナウイルス感染症への対応の変更が政府により決定され、以前と同様の社会生活への回帰が図られることとなりますが、コロナ禍は社会に不可逆的な変化を与えており、同様ではあっても以前とは異なる社会へと変化しています。皆さんも経験された遠隔授業やリモートワークの方法が確立したことはその代表的な例ですが、その他にも電子決済の普及に代表されるデジタルトランスフォーメーションや、サプライチェーンの変化、大気汚染の改善などもその例と考えて良いでしょう。

このような変化が進む社会では、自らが変化の中にあることを意識し、その変化の流れを捉えていくことが重要です。平成 31 年 4 月の入学式において、私は、鴨長明の方丈記の冒頭を引用しました。

「行く河のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」

すなわち、我々がうつろいゆく社会の中で自己を確立するためには、変化を取り込み、自らが変わることが必要であると述べました。元來、この冒頭部分は、平家物語の冒頭と同じく、仏教における無常を表しています。無常とは、この世の全てのものは生々流転し、永遠

のものは存在しないという考え方です。方丈記では、水の流れ、そこに浮かぶ「うたかた」を借りて無常を表しています。「うたかた」を人、水の流れを社会変化と捉えるならば、社会変化の中で人は変化を続けていくことになります。さらにいえば、「うたかた」を形作るのは、水そのものですから、社会の変化を取り入れ、人として変化、成長していくことになることを述べている、と捉えることもできます。本日ここに集った皆さんは、和歌山大学での修学期間でどのような変化を実感しているのでしょうか?外から確認できる変化もあれば、内なる成長を遂げた変化もあるでしょう。その変化は、自ら気づくことかもしれませんし、他者からの指摘によって意識することかもしれません。大切なことは、自らの置かれた社会の変化と自らの有り様の変化を理解し、それを次の成長へのステップとすることです。

皆さんが向かう社会は、すでに大きく変化していますが、その変化は大きな変化の一部にすぎません。一時的な変化の流れに乗るといった消極的な姿勢に陥ることなく、新しい流れを作ることが大切です。新しい流れを作るための提案は、「前例がない」と却下されることも多いでしょう。しかしながら、そのような言葉に気圧されることなく、新しい流れを作るチャレンジをしてください。前例に倣う対応では変化に取り残されてしまいます。

この停滞から脱却するには、主体的な行動が必要です。和歌山大学では、学生の主体性を伸ばす教育として、アントレプレナーシップ教育を進める方向に舵を切りました。これまで、国立大学は、普遍的な高等教育を地域によらず提供することを主たる目的として、各都道府県に設置されてきました。しかし、「都市部への一極集中」が進み、「失われた30年」と言われる低成長の時代の中で、国立大学には、その知的資源を最大活用することで、社会変化の原動力として寄与することが機能に付加されています。このような社会的要請の中で、社会が求める新しい主体的プレイヤーを育成することが大学に課せられた責務です。和歌山大学は、現在の、そしてこれまでの学生の皆さん、そして社会の皆さんと共に、新しい社会を創る人に寄り添い、大学の持つ知的資産を社会に実装していきます。このような取り組みの中で、本日の学位記授与式に参加された皆さんと再会する機会がきっとあるでしょう。

最後に、これから社会に船出する皆さんへ餞の言葉を贈り、式辞を閉じます。

「さあ、進め。端っこの和歌山から日本を変えるんだ。」



令和5年3月24日  
和歌山大学 第17代学長 伊東 千尋